

岩手県総合計画審議会
令和 8 年度第 2 回県民の幸福感に関する分析部会

(開催日時) 令和 8 年 5 月 18 日 (月) 14 : 00 ~ 16 : 00

(開催場所) エスポワールいわて 特別ホール

- 1 開 会
- 2 議 題
 - (1) 分野別実感の分析について
 - (2) その他
- 3 閉 会

出席委員

吉野英岐部会長、和川央副部会長、蛸崎奈津子委員、竹村祥子委員、谷藤邦基委員
Tee Kian Heng (ティー・キャンヘン) 委員、渡部あさみ委員

欠席委員

なし

1 開 会

○田高政策企画課評価課長 ただいまから第 2 回県民の幸福感に関する分析部会を開催いたします。政策企画課の田高でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日でございますが、委員全員に御出席いただいております。ありがとうございます。運営要領第 6 条第 2 項に基づきまして会議が成立していることを御報告いたします。

議事に入ります前に資料の確認をさせていただきたいと思います。本日新たにお配りしている資料でございますが、次第と資料 1、資料 2、資料 3、合わせまして 17 ページのものとなっております。

それから、前回お配りした資料と昨年度の部会の年次レポート、それから前回配付してございましたが、今年作成いたしましたいわて幸福白書 2026 をお手元の方に配付させていただいております。御確認いただければと思います。

また、前回の部会で御了承いただきましたとおり、今回の部会も非公開とさせていただきます。

2 議 題

(1) 分野別実感の分析について

○田高政策企画課評価課長 それでは、議事に入りたいと思います。運営要領の規定によりまして、部会の議長は部会長が務めることとされておりますので、吉野部会長よろしくお願いいたします。

○吉野英岐部会長 それでは、第 2 回目の分析部会を始めます。前回は、1 回目でしたので、ざっと全体を見ての感想等をいただきましたけれども、今日は有意に低下した部分 2

つ、有意に上昇したのが1つ、あと常に低位、低い値のものが幾つかありますので、その要因というか、背景を中心にその部分については今日終わる予定にしていきたいと思いますので、よろしくお願いいたしますと思います。

では、前回、1週間しかないのですがけれども、そのときに出た質問等々について追加で資料を用意していただいていますので、基礎資料に基づいて御説明を事務局からお願いします。

○松本政策企画課特命課長 本日もよろしくお願いいたします。評価担当の松本と申します。

まず、第1回の資料の差替えをさせていただきまして、その部分はまた後程御説明を差し上げたいと思います。今からは、先に前回の御質問に基づいて作りました資料について御説明をさせていただきます。

今日の資料、第2回の資料の3ページをお開き願います。前回の御質問としては、該当行動のあった人だけを取り出して平均の時間を取ってみると、前回と同じようによりいろいろ分かるのではないかとことでした。今机の上にも配付しておりますが、令和7年度年次レポートの41ページから70ページまでが前回の追加分析でして、その部分を令和8年版としてリニューアルすれば全部はつきり分かるということで、できるところだけですが、御質問の部分以外も含めてやらせていただきました。

まず、行ったり来たりしますけれども、第2回県民の幸福感に関する分析部会資料の3ページ、資料1、生活満足度の調査結果で、これが前回令和7年調査の42ページと同じですが、令和8年の生活満足度の調査結果を載せています。結果は、満足が少し上昇し、不満が少し下がったという結果です。

次ですが、資料2、生活時間（行動時間）の調査結果の2の1、調査概要です。令和7年の調査結果では46ページですが、その表をこちらにも載せているものです。これらは同じ表になっております。県民意識調査と補足調査でどういう回答を行動・家事の種類で回答を求めているかで、回答を求めているところに丸をしています。回答から除いた人たちを表2に示しています。この内容、表1の内容は令和7年調査の46ページと同じです。

1ページめくっていただきまして、4ページです。ここからが該当行動なしを含む平均時間で、第1回資料で示しているものと同じです。まず、5,000人調査の方の結果が2の2の1です。5,000人の調査の結果、前回47ページと48ページで行動別に示しています。行動別は次回第3回でお示しますが、取り急ぎお示しできるのがこの1次、2次、3次に活動時間にまとめたものです。これが男女別と年齢別に記載しているものがこの図2です。図2を見ていただきますと、このような結果になっていますが、令和7年結果と比べてみると、例えばここではすぐには比べることができないのですが、計算してみると女性の2次活動時間が10分ぐらい短くなっているという結果だったり、20代の2次活動時間が20分ぐらい短くなっていたりすることが比べてみると分かります。それぞれ令和7年の47、48ページでは、2次活動、1次活動の時間が書いていないので、ぱっと見て分からないのですが、全部足すとそうになっています。

次、今回の資料の5ページに進みます。こちらが補足調査での全ての平均の時間で、令和7年調査の49ページでは令和7年までを示していましたが、それを令和8年を一番上

に足しています。これが第1回の資料でも示しているものです。例えば一番上の男女計で、3次活動時間が少し減ったとか、2次活動時間が増えているということが令和7年に比べて分かります。

1ページめくっていただきまして、6ページです。ここでは、補足調査で行動別の時間を示しています。令和7年度の調査の年次レポートでは50ページから51ページです。図6、図7、図8とありますが、合計したもの、男性だけ、女性だけと分けたもので令和8年を上を追加しています。それぞれ大きな変動は、見た目からだとそんなに感じられないかなと思っております。図の番号も令和7年度の調査と同じような番号に6、7、8となっているので、見比べやすいかと思います。

次、8ページに進んでいただきまして、ここからが御質問にあった該当行動ありのみの平均時間で、5,000人の調査と600人の調査の両方を示したものです。令和7年度年次レポートでは、53ページに進んでいただきまして、53ページの表と図を令和8年の調査でやってみたものがこちらです。表3が令和8年の調査でのそれぞれの行動時間別に該当行動ありという人のみで平均を取ったものですが、数字だけで比べてみないといけないので、比べにくくて非常に恐縮なのですが、例えば表3ですが、育児時間で合計男性を見ると79.7、女性が143.0と、合計で111.0となっております。令和7年度のレポートの53ページですが、そちらだと男性が57.9、女性が142、合計が99.4で、女性は大体同じなのですが、男性の育児時間が増えていることが分かります。また、真ん中の黄色か黒か色が塗ってあるところは、男女間の差になっておりまして、女性の生活時間、行動時間が長い方が灰色に塗っていて白抜きの方です。男性の行動時間が長い方が赤い字で、マイナスになっています。例えば仕事だったら男性の方が長く仕事をしていますけれども、その他家事は全部女性が長くやっているということです。それをグラフにしたのがその下の図9です。これも令和7年度年次レポートの53ページの図2ー9と同じもので、それを令和8年にしたものです。そこで先ほど御説明した、例えば育児を見ていただくと、84.4分女性が長かったのが今回は63.3分で、20分ぐらい女性が長い分数が減りました。仕事や睡眠や食事などはほとんど変わってないのですが、介護・看護でも女性の方の長い時間が少し減っていると思います。また、家事時間を一番右に示していますけれども、合計すると家事時間は女性の方が非常に長いのですが、その長い分数も少し減っている一方、夫婦世帯ではやはりさらに女性が長くなってしまっていました。

次ですが、9ページに進んでいただきまして、それを年齢層別に男女差を示したものがこの図です。令和7年度年次レポートでは55ページです。今回の資料の9ページを比べていただきますと、令和8年と令和7年を比べることができます。例えば若年齢層で睡眠が女性の方が前回5分長かったのですが、今回は23分長いという結果でした。また、その下の仕事の若年齢層を見ると、下に男性が20分ぐらい長くなっていることが分かります。先ほどからお話ししていた育児は、9ページの右下ですけれども若年齢層が94.9分で、令和7年度の年次レポートだと56ページですけれども、146分長かったのが94.9分となり、少し男女間の差が減っておりました。

年次レポート56ページに続きますが、こちらの令和8年の資料だと10ページに進むと介護・看護、買い物、3次活動の時間を同じように載せています。また、家事時間の差も同じように載せております。それが令和7年の年次レポートであれば57ページまでです。

さらに続けますが、今までは5,000人調査の方の結果でやっていましたが、補足調査の方で該当行動ありの人だけを取り出して平均を取ったものが11ページの図23です。令和7年度の年次レポートでは、53ページの図23です。その令和8年の上に足したもので、こちらでも5,000人調査の方と同じように、下の表にあるように育児時間が男女計では20分ぐらい長くなっています。仕事時間も少し増えています。

12ページに進んでいただきます。こちらでも男性が該当行動のみを取ってみると育児時間が20分ぐらい増えています。一方、その下の表で女性を見ると仕事も10分ぐらい長くなっており、やはり男性と同じように育児時間も増えています。

次に、13ページに参ります。こちら令和7年度の年次レポートでは、61ページのものに令和8年を足したものです。青い棒グラフがそれぞれの活動時間、平均の活動時間、そして赤い折れ線グラフが該当行動ありとした人のゼロ分以外だった人の回答者の割合です。睡眠と食事は、もしやっていないとすればエラーとしてはじいておりますので、100%となります。一番上と一番下、図26と図28です。令和8年を足したのですが、それぞれ26、27、28と、14ページに進んでいただきまして、通勤・通学、仕事、学業と並べております。

なお、14ページの一番下、図31の学業ですが、令和7年度の年次レポートには学業はサンプル数が少ないので外していたのですが、こちらは概要資料なので、参考として入れております。

15ページにいきますと、食事の用意・後片づけ、掃除・洗濯、育児です。育児は、先ほどお話ししたように平均の時間が令和8年度で少し増えています。

16ページに参りますが、介護・看護も令和7年度年次レポートでは入れていないのですが、こちらでは参考として入れています。最後は買い物で、令和8年を追加しております。

ここまでの御説明は以上になります。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。資料1と資料2並びに昨年度のレポートも併せて御説明いただきました。

ここまでの御感想や、さらに御質問があればと思いますけれども、いかがでしょうか。ティー委員から。

○ティー・キャンヘーン委員 すみません、御説明ありがとうございます。

8ページの表3ですけれども、多分去年も同じようなコメントしたのですが、高年齢層と育児ということを思っていて、これ難しいかもしれないけれども、それぞれのサンプル数というのはどの程度あるのかなと気になりまして、これ難しいですか。一回サンプル数を見た方がいいのかなと思ったので。

○松本政策企画課特命課長 難しくないです。

○ティー・キャンヘーン委員 サンプル数があると。これは睡眠、食事、仕事というのはそれぞれのサンプル数が違うというような感じでいいですね。

○松本政策企画課特命課長 はい、そのとおりです。

○ティー・キャンヘーン委員 それぞれ違うので、横で比較をしないといけないと。要はサンプル数を全部1次、2次行動、3次活動のそれぞれの項目の回答者数が全部違ってくるので、ここを見て何か読み取ることは難しそうだというのは、今の話聞いて少し分かりました。どうもありがとうございました。

○吉野英岐部会長 これ該当者のみだから、それぞれ男、女、合計、サンプル数もすぐ出せるのかな。

○松本政策企画課特命課長 はい。

○吉野英岐部会長 ちなみに、今の高齢者層のところは家事のところ、家事というか。

○松本政策企画課特命課長 少々お待ちください。

○吉野英岐部会長 でも、ティー先生の理解で合っていて、それぞれ該当者数が違うので、睡眠と食事はほぼ100だということになっているけれども。

○松本政策企画課特命課長 はい、合っています。

○吉野英岐部会長 やっている人だけを取って言っているから、結構やっていない人もいるかもしれないと。若年層でも、していない人はしていないかもしれないしと、子育て、育児、特にね。

では、和川委員。

○和川央副部会長 今のティー先生の御質問から引き継いでもう一回私から確認なのですけれども、そうすると合計というところに睡眠とか食事は基本的にはほぼ全員がサンプル入っていますよと。仕事とか育児とかは分母が該当する仕事をしている人とか、育児をしている人だけが分母になりますよと。だから、これを横で見るのは多分できないよというのは、先ほどティー先生の御指摘だと思うのですけれども、そうしたときに第3次活動時間は、そうするとどうやって出ているのだろうということなのですが。第3次活動時間というのは、それ単独で計算すると残差で出るということは、必ず横軸の計算が入ってこなければいけないのですけれども、仮にこれが単なる平均値なのだという事なのであれば3、8、9.2というのが県計平均値ということになると思うのですけれども、そうすると4ページの県計の392というのと合わないですね。この8ページは県民意識調査5,000人の方ですよ。

○松本政策企画課特命課長 はい。

○和川央副部会長 であれば、ここ一致するはずだよなと思っていまして。

○吉野英岐部会長 3分短いのね。3分合わない。

○和川央副部会長 そうです。

○吉野英岐部会長 約3分。3分・・違うのだろうね。何で3分違うか分からない。

○和川央副部会長 どういう第3次活動時間の計算したのかなと。後でいいです、これは近々の話ではないので。

と考えていくと、今後ろの方で補足調査の細かい分析をしていただいているのですけれども、県民5,000人規模のものが出ないとこの辺りは議論がしづらいのかなと思っています。補足調査は、サンプル数が少ない中で、またさらにサンプル数小さい中で議論していますので、やはり県民意識調査である4ページのものの細かいものが出てきていただけると多分いいのだろうなと思います。

○吉野英岐部会長 では、疑問点を出していくときは解消する方向でいきましょう。これやったのは去年からなんだよね、ここまで、まだ去年の分と今年の分しかデータはないのかもしれないのですけれども、使えるのであれば結構興味深いデータなので、正確にどういった人たちが答えているものが集計されているのかを確認しつつ、事務局の方に確認をお願いして議論を進めていきたいと思います。

そのほか今のうちに質問があればということで、あるいは気づいた点でも結構ですが、いかがでしょうか。

では、谷藤委員どうぞ。

○谷藤邦基委員 正直感ずるところはそう多くはなかったのですが、取りあえず資料1からいうと、私はここにかなりこだわってきたという経緯もあるので、改めて今回見て、意外と満足度も下がっていないなというのが1つあります。インフレ自体はもうかなり進んできていたはずなのですが、じわっと来るインフレとかそういうものは、満足度にもあんまり影響しないのかなというところです。

ちょっと古い話というところですが、コロナの頃の満足度というのは悪くないというか、むしろ上がっているぐらいで、これはどう思えばいいのかな。そう思うと、リーマンショックの頃の変動というのは大きいですよ。

○吉野英岐部会長 平成19年あたり。

○谷藤邦基委員 19年、20年あたりはリーマンショックの影響だったと思うのですけれども。コロナも急で、急でもなかったかな、じわっと来た感じかな。まあ、じわり、じわりと来た感じもありますから、そういう意味では、あのときはお金が現実にかんりの額給付されたということもありましたから、そういった影響もあるのかもしれませんが、意外とここ最近のじわっと来る変化の中では満足度も、あるいは主観的幸福感もそんなに悪く

ない。むしろ改善しているかもしれないぐらいの状況があるというのは、私なりには意外といえば意外でしたけれども、ただこの後ちょうど2月28日から始まったあれはイラン紛争と言うべきなのですか、戦争と言ったらまずいのですよね、多分公式には。あれのおかげでいろいろな影響が出始めていて、物価が多分本格的に上がり始めるのが来月以降ではないかと、来月から6、7、8月ぐらいにかけて結構出てくるのではないかという話もありますので、この先どうということになっていくのかなというのはちょっと気になっているところではあります。ただ、いずれ少なくとも1月、2月ぐらいまでの調査ということであると、さほどの社会情勢の影響は出ていないということなのかなと思って見ていたところでした。

あと、活動時間の方、これはいろんな解釈があり得るので、私としては何とも言えないなと思って見ていたところですが、1つだけ4ページで年代別の集計していただいているのですが、これ10歳刻みでしか取れないという限界があるからだとは思うのですけれども、60歳のところから目立った変化が出始めている。多分これ私の想像ですけれども、本当に目立った転換点があるのは65歳ぐらいのところ、だから65歳を境にして例えば5歳刻みで取ればもうちょっと65歳までは2次活動時間が長くて、65歳以降から2次活動時間が目立って減ってくるというような状況があるのではないかなと思って拝見していたところでした。

それぐらいですかね。資料3については、この後特に説明は多分ないですよ、資料3は。これは私が言っていたやつなので、一番最後に資料3がついているわけですが、これが前回ちょっと話題になった岩手県の経済的豊かさは実質1位であるよと言っている根拠になっているものだと思います。ただ、この資料には具体的な数字が出ていないので、そんなものですかとしか思わないのですが、ただ前回も言いましたけれども、岩手日報の記事に具体的な、いわゆる可処分所得でもないけれども、必要経費を除いた自由に使えるお金みたいな意味で出ている金額月額30万円を超えるというのはちょっとねという話は前回したとおりです。

ただいずれこの資料が言わんとするところは、東京が皆さん思っているほどいいわけではないよというのが言いたいだけの資料で、たまたま岩手県が1番になりましたけれども、これはあまり真に受けてはいかんのだろうなと思っています。特に加工度の高いデータというのは気をつけなければいけないというのは前回も言いましたけれども、意図せざる結果が出ることはよくあるので。そう思うと、どうしても国が発表したデータだということと無条件にありがたがる傾向があるのですが、それは実際実務やる立場では気をつけなければいけないところで、マスコミと実務やる人の違いは多分そこにあるので。

私、ちょっと余計な話ついでに言いますけれども、前から気になっていたのは都道府県別の食料自給率というやつ、あれで岩手県100%を超えていますということで随分話題になったわけです。最近ほとんど取り上げられることもなくなりましたけれども。ただ、あれ見たときに私は非常に違和感があったのは、100%を超えているところはほとんど畜産県なのです。北海道、岩手、宮崎、鹿児島あたりがかなり上位に来ていた。秋田もなっていたかもしれませんが、そういった意味では秋田はちょっと別なのですが。畜産県が多いということは、あれあくまでも農産物として産出されるカロリーと消費されるカロリーの比率でしかないのです。であれば生産過程で投入されるカロリーはどう計算されている

のだろう。結局畜産というのは、経済的な価値を高める活動ではあるけれども、今どきの畜産は草を食べさせて、それで終わりということはほとんどないので。多分ほとんど穀物飼料を食べさせているわけです。ということは、穀物を投入して畜産物をつくっているということは、そこでカロリー消費が発生しているはず。しかも、穀物は大部分輸入ですよ。そういったことまでちゃんと計算したらどういう数字になるのだろうというのは昔から私は疑問に思っているのです。ちょっとそこ追及してみたことはないので、何とも結果どうなるか分からないのですけれども、いずれにしても国から出てくるデータというものを地方が無条件に受け入れるというのは非常に危険だなと思っています。

ちょっと余計な話をしました。すみません。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。資料3はまだ説明しなかったのですけれども、先にコメントをいただきました。では、事務局どうぞ。

○松本政策企画課特命課長 今お時間をいただいたので。育児の高齢者のサンプル数ですけれども。

○吉野英岐部会長 8ページ。表3のところですよ。

○松本政策企画課特命課長 ティー先生に御質問いただきました8ページですけれども、9です。

○吉野英岐部会長 9人しかいないのですか。

○松本政策企画課特命課長 9人しかいないです。育児の高齢者は。

○吉野英岐部会長 お孫さんの面倒見るのは育児に入らないと、お孫さんの面倒を見るのは。

○松本政策企画課特命課長 70歳以上なので、恐らくお孫さんだと思うのですけれども。

○吉野英岐部会長 9人しかいないの。

○松本政策企画課特命課長 ええ。

○吉野英岐部会長 そんなはずはない。

○松本政策企画課特命課長 そう回答していただいたということだとは思いますが。

○吉野英岐部会長 御自分で認識して書くものだから、幾らお孫さんの面倒を見ても、育児と思っていなければ書かない可能性はあると。

○松本政策企画課特命課長 はい。

○ティー・キャンヘーン委員 実際は見えないのではないですか。

○和川央副部長 余暇になっているのではないですか。

○吉野英岐部長 結構お孫守で。

○竹村祥子委員 私は逆さだと思うのですが。

○吉野英岐部長 うん、忙しくて。

○竹村祥子委員 結構見ていると思います。

○吉野英岐部長 お嫁さんが働いているからという感じか。

○ティー・キャンヘーン委員 みんな保育園に行っています。

○吉野英岐部長 保育園か。

○竹村祥子委員 あまり記録に残る話ではないのですけれども、もう 20 年くらい前の育児ということだから、今に当たるかどうか分かりませんが、昼間どうしても病院に連れていかなければいけないときに、それこそ盛岡市内の松園の病院に連れていったのですけれども、おじいさんが結構連れてこられていて、おばあさんでなくて。多分車に乗ってくるからだろうと思うのですけれども、結構おじいさんたち頑張ってるじゃんというのが私の。

○吉野英岐部長 小児科か何か。

○竹村祥子委員 小児科です。お母さんが来られないというのは働いている、その時間午前中ですからね、ちょっとこれは難しいだろうし。だから、盛岡は9人はちょっと残念な数字ではありましたが、実質的にはちょいちょい手伝っているのではないかなというのが実感なのですが、いかがでしょうか。ただ、働いている家族が近くに親族がいるかどうかというところに大きく差があって、私なぞは親族がいなかったものだから、自分で連れていっているわけですが、親族がいれば、おばあさんもそうかもしれませんけれども、おじいさん結構手伝っているのではないかなというのが実感なのですが、いかがでしょうか。

○吉野英岐部長 蛸崎先生いきましようか、病院というか、医療機関にいらっしゃると

ということもあるので。

○蛸崎奈津子委員 ありがとうございます。実際は恐らく近くに御家族がいらっしゃればかなりお手伝いはされているようには思います。

一方で、今の若い方々は御夫婦で何とか乗り切りたいという思考をする方も結構増えてきているなど。それで、少し育児をしてみて、やはり無理だということで、2人で共倒れになってしまって、そこから御実家の方などがお手伝いに来るとということもあるなどというところですよ。

あとは、盛岡以外の沿岸ですとか県北のあたりは御実家の方のサポートというところは、県央に比べてはサポート率は高いなというところは印象としてはあります。なので、私も9人はちょっと意外な数字だなとは思いました。

○吉野英岐部会長 当事者もまだ何人かいますけれども、高齢者の育児は9人ということなのですけれども、9人しかいないというのは。

○渡部あさみ委員 私が考えていたことは、先ほど御意見にあったように、この9よりは多いのではないかなと感じております。というのも週末にイオンなんかに行くと結構おじいさん、おばあさんと一緒に子供が複数一緒にいたりして、大変そうだな、頑張っているなというようなことを感じるからです。

祖父母の子育てということに関して2件ほどコメントがありまして、1件目なのですが、小学校でPTA総会があったときに校長先生がおっしゃっていたのは、おじいちゃん、おばあちゃんに任せているおうちもあるけれども、ちゃんと見ていないケースが多いと。そういうところで、結構インターネットのトラブルが起きがちだから、もう一度ちゃんと注意をするようにというようなコメントがあったので、公立の小学校なのですけれども、数的にはそういった御家庭あるのかなと思いましたが、あと私は娘も息子も今小学校に上がって、今まではこども園とか保育園に迎えに行っていたのですが、そのときはお母さんがお迎えに来ているイメージだったのですけれども、児童センターになってから、つまり小学校以上の子供については、結構おじいちゃんがお迎えに来る家庭も多いんだなということを最近感じていた次第です。

私からは以上です。

○吉野英岐部会長 もう一人、はい、どうぞ。

○和川央副部会長 私も今でも送り迎えしているのですが、おっしゃるように私はおばあさんが多いなという印象はあるのですが、いずれ3分の1ぐらいは御両親ではないだろうなというぐらい、特に朝と夕方とあと病院ですよ、おっしゃるように多いかなと思っています。

アンケートの性質上、冒頭というか、子供の数を聞いているので、もう育児と言った瞬間もう思考としてなっているから、多分統計上はこれ第3次活動時間に入っている可能性が私は高いかなとは思っていますが、そういった意味で実態とすればおっしゃるように9

人ではないと思うのですが、統計上は多分そうになっている可能性はあるかなとは考えます。

○吉野英岐部会長 ありがとうございました。9人というのは男女合わせて9人と。

○松本政策企画課特命課長 はい、男女合わせて9人で、ちなみに男性が3人、女性が6人です。

○吉野英岐部会長 すごく貴重な人たちですね。

○蛸崎奈津子委員 ちなみに、介護と看護は何人ですか。

○吉野英岐部会長 老老介護みたいな感じですか。

○蛸崎奈津子委員 育児のお孫さんの通院とかがそちらに入っているのかなと。看護みたいな。

○吉野英岐部会長 あっ、看護。これは、育児ではなく看護と。

○和川央副部会長 なるほど、なるほど。病院なんかはそうかもしれませんね。

○蛸崎奈津子委員 育児のお孫さんの通院とかがそちらに入っているのかなと。

○吉野英岐部会長 そうか、看護。

○蛸崎奈津子委員 介護も入っていらっしゃると思うのですが。

○松本政策企画課特命課長 すみません、介護と看護は70歳以上はたくさんいるので、今すぐ計算できないので、少々お待ちください。

○蛸崎奈津子委員 かなりいらっしゃると。

○松本政策企画課特命課長 はい、かなり。

○吉野英岐部会長 今おっしゃったように御本人がどうそれを解釈しているかによって、入るカテゴリーが変わるので、9という数字はちょっと少な過ぎるという御意見も結構ありましたけれども、やっていないわけではないのではないかと、やっている場合、別の項目に計上されている可能性もあるかもしれないということですかね。

はい。

○渡部あさみ委員 少し考えたのがこの9名という方が実際に御自身の子供のケアをさ

れているケースもあるのではないのかなと考えております。障がいがあるであったりとか、そういったことを理由に。なので、孫守の話とつなげていいのかなという迷いもありました。

○吉野英岐部会長 なるほど。よく調べたらそういう実態だったと、今のはね。ありがとうございました。

そのほかありますか。

どうぞ。

○松本政策企画課特命課長 もう一つ、余暇時間、3次活動時間の話でしたけれども、一人一人のデータから3次活動時間が存在する人の平均を取ったので、一人一人の横を見れば3次活動時間は存在するのですけれども、こちらの横で見ると3次活動時間は合わないということにはなります。ですけれども、和川委員がおっしゃったように3次活動時間それで取れば、その平均時間とこちらの4ページの平均時間は合うはずなので、そこが合わないのは少し検討させていただきたいと思います。

○吉野英岐部会長 そうですね、ちょっとの差なのだよね、3分ぐらい。

○松本政策企画課特命課長 誰かが入っているとか、誰かが入っていないとかそういう何か技術的な問題があるか。

○吉野英岐部会長 どこかを外したらそうなったみたいになる可能性があるかと。

○松本政策企画課特命課長 そこがどこかのミスがあるか、何かがあるかと思います。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。せっかく非常に労力をかけてつけてもらっているデータなので、これだけきちんと書いてもらっている以上、こちらは知らんぷりはできないので、ここの生活時間というのが何を意味するのかということと、それが年代や性別に従ってどこがどう変わるのかについてはいいデータだと思いますので、引き続きより正確に検討していきたいと思います。

少し宿題が残ってしまいましたけれども、さっきの資料3はどうしますか、谷藤委員が解説してくれましたけれども、あのおりですということ。

○松本政策企画課特命課長 先ほどの介護・看護、高年齢層は男女計で52です。サンプル数。

○吉野英岐部会長 でも、3,000人。

○松本政策企画課特命課長 3,000幾つで。

○吉野英岐部会長 これ高齢者というのは60歳でしたか。

○松本政策企画課特命課長 70歳以上です。

○吉野英岐部会長 70歳以上。結構なサンプル数あるんですけど、1,000ぐらいあるんですけど。

○松本政策企画課特命課長 3,000いくつ。高齢者だけは、少々お待ちください。

○谷藤邦基委員 1,200人くらい。

○吉野英岐部会長 1,200人くらいいるから、そのうち僅か9人とか僅か50人というのは非常に少ない気もしないでもないけれどもね。自分の子供、自分の親あるいは配偶者。配偶者は入れないのか。ああ、入れていいのか。に該当する方が五十何人、1,200で。そうかなという気もしませんか。もうちょっと。
どうぞ。

○蛸崎奈津子委員 先ほど渡部先生がおっしゃったように、孫育てとか子供さんの保育園の迎えとかというよりは、御家族が障がいがあってですとか、医療的なケアが必要な方とか、その実数と捉えると多分一致するなという印象はあります。

○吉野英岐部会長 そのぐらいになるのではないかと。そうか。それ以外にでも介護や育児的なものを行っている人はいるわけですね、きっとね。

○蛸崎奈津子委員 3次活動。

○吉野英岐部会長 に入ってしまったのではないかと、そこは。

○蛸崎奈津子委員 はい。

○吉野英岐部会長 分かりました。ありがとうございました。あんまり例示しなかったりしたけれども、時間聞くときの質問文として、細かくこの場合はこっち、この場合はこっちと。

○松本政策企画課特命課長 はい。参考資料の2ページからですが、これが質問項目です。その時間の部分については508ページですので、あまり書いていない。一番下に注2で少し書いていますが、それ以外はこのくらいということです。さらに、夫婦世帯以外の方では510ページもありますが、同じです。

○吉野英岐部会長 そうですね、特にこういうものをこっちとは言っていないですね。育

児と読んでしまうとお孫さんが入らないという感じですかね。分かりました。

では、そういう結果が一応出ているということですね。これ例えば令和7年の調査も見てみて、サンプル数が同じぐらいであれば同じような解釈をしているのだろうなということは多分確認取れるので、狭めな解釈になっている可能性があるということですかね、去年、今年までもし同じサンプル数であればね。でも、同じサンプル数であれば比較ができるので、逆に。そこだけ確認してください。

では、次いいですか、資料3。

○松本政策企画課特命課長 はい、資料3、先ほど谷藤委員にお話ししていただきましたが、前回谷藤委員にお話をいただいたので、御紹介でした。

おっしゃるように、数値としては非常に不明な点もあるので、一つの分析結果がこうでしたと受け止めているところではあります。例えば岩手県では、一番上の可処分所得順位、全世帯では13位にありまして、それから可処分所得の中央世帯で3位。それから真ん中で基礎支出（B）ですけれども、オレンジに塗っている中央世帯で24位にでして、それを引くと3位になって、通勤時間を考慮すると1位になっているという表です。

これも谷藤委員がおっしゃっていましたが、前回5年前の調査ではそうはなっていないので、なかなか受け止めも難しいところかなと考えています。

○吉野英岐部会長 話題性がある調査結果だったので、新聞でも大きく取り上げられましたけれども、そのとおり受け止めるかどうかはちょっと注意をするところであると。ただ、数字とか順位で出すとこういうふうにはぼんと出されるので、おっ、おっというような耳目を引くところにはなるのだろうなということで、岩手県、通勤時間を費用換算するということは、長ければ長いほど可処分所得が減るという意味ですかね。

○松本政策企画課特命課長 はい、そのとおりだったかと思います。

○吉野英岐部会長 分かりました。

どうぞ。

○竹村祥子委員 1人だけで生活実感で申し上げると、この一番下の部分に関しては、通勤時間の控除というところに関しては、そうだろうなと思います。私は、東京の上野から埼玉の浦和美園という埼玉高速鉄道の一番終点のところまで今通っているのですけれども、これ浦和駅を通過してバスにもう20分乗って大学まで行くという方法とかいろんな方法があるのです。ただ、どれを取っても往復で定期を買わなければいけない、1,000円以上、行って帰って2,000円。こっちは、岩手大学に勤めているときには小走りで15分と。だから、仕事場との間でちょっと戻って何か仕事をするとかというような、職住はもちろん分離しているのですけれども、こっちだとそういう気安さみたいなものがある。それだけではなくて、京浜東北にしても、上野東京ラインにしても遅延等、それから途中で行き先変更がもう何回も起こります。先週から今週の間の1週間で行き先変更が大船行きだったものが上野止まりになるという経験がもう2回あるのです。もちろん複数走っていま

すから、そのところは乗り換えて行けば家までももちろん数分の違いで着くかもしれませんが、
んけれども、またかという感じがするので、このところを通勤時間として考えたときに、
東京とか神奈川とか埼玉というところで非常にストレスフルであるということは実感とし
ては思います。その割には、固定資産税はめっちゃ高いので、東京都の中間層の世帯はう
ちだと、他地域に比べて経済的に豊かであるとはいえない、そのとおりという感じがいた
します。ちょっとこれ記録に残ると、後で削除を。

本当に個人的な経験ですけども、その感じは確かにあって、岩手の方が明らかに余裕
がある。例えば松園に住んでいても、途中でバスが行き先変更になったりは、多分あんま
りしないだろうし、雪の中歩くとかそういうことはあるかもしれないけれども、通勤時間
ということからすると、やっぱりストレスフルだと思いました。

○吉野英岐部会長 東京の厳しい現状を教えてくださいました。
どうぞ。

○和川央副部会長 まずこういう結果が出たというのは事実なので、僕は PR としてどん
どん使っていったいいのではないかなと。こういう見方であればこういう考え方があるの
だよと、必ずしも東京が独り勝ちではないのだよという説明はどんどんやってもいいかな
と思います。

一方で、谷藤委員が言ったように加工統計には注意しようというのはそうなのですが、
これ上から丹念に見ていくと可処分所得の平均値自体が 13 位なのです。埼玉、兵庫、宮城
よりも多いのです。一般的に可処分所得は、岩手県は通年 40 位前後が一般的だったのです
けれども、これあり得ないですね。しかも、中央値だと 3 位なのです。これ加工統計前の
問題で、基礎統計自体もちょっとこれは大丈夫かなと、これ全国消費実態調査が全身の調
査なので、多分岩手県でも 300 とか 400 世帯しか取っていないのではないかなと思います。
その辺りは谷藤委員が詳しいと思うのですが、いずれそういった意味では加工統計以前に
も基礎統計自体も結構眉唾な可能性があるなというのは御理解いただいた上で、どんどん
使っていただければと思います。

○吉野英岐部会長 そもそも可処分所得高いではないかと。

○谷藤邦基委員 炎上状態ですけども、だから実際に和川委員が指摘されたとおり、可
処分所得の 13 位ということ自体がちょっと「えっ」と思うところなわけですし、秋田が
36 位で青森 40 位ですが、この辺なら、ああ、いかにもなと思うわけです。だから、確か
に通勤時間を考慮すれば順位は上昇するだろうという、それは納得感あるのですけれども、
最初の数字が怪しいのです。家計構造調査というのが一番ベースの資料になっているよう
ですけども、これ前回も言いましたけれども、たしかサンプル数 400 人ぐらい、400 世
帯なものですから、やっぱりちょっと最初のサンプルに偏りがあるのだろうなと思った方
がいいと思います。

具体的に詳しいことというのはほとんど調べても分からないのですよね。ただ実際私も
もう 20 年ぐらい前かな、岩手県にいろいろ有能な人材を呼ぶためにどうするかという議

論をしている中で、岩手県は物価安いから実質賃金というか、実質所得多いんじゃないのという議論をしていたことがあって、いろいろやってみたけれども、こういう結果にはならないのです、普通にやっていたら。だけれども、国が出したデータだということを前面に打ち出して宣伝に使うのは私もいいのではないかと一方では思っていますが、それを自分で真に受けてはいけないということです。おかしい数字ということを知の上で、ただ国がそう言っていますというのは、これはうそではないので、そういう使い方はあってもいいかなと思う。まあ、ちょっと変な話になってしまいましたけれども。

○吉野英岐部会長 これはこれで国が出しているの、公式な調査ですけども、よく幸福度調査というのも都道府県別に出しまして、一番下位になってしまう埼玉県が猛烈に怒ってくるという。これは、国はやらないので、大学とか研究機関がやる調査なので、特にしかも客観データの積み上げでやっていきますので、一番ビリになっちゃった県は調査機関に対して「どういうことなんだ」と言ってきた例もあったとは思いますが、こういう国がやっている調査も額面どおり受け取れるかどうかはちょっとまた別だし、神奈川県が一番ビリなので、黄色のところはね。神奈川県が怒って、別の計算式を出して持ってくる可能性もないわけではないというかもしれないですね。岩手は逆に一番トップなので、このままでいいのではないかなと思うのですけれどもね。統計というのは、常識とはやや違うような結果を生むときがあるし、でも違う結果を生んだときの方がニュースになるので、きっちりとデータの裏づけをやった上で、我々も結果を公表していかなければいけないかなという一つの勉強になるようなデータだと思います。

では、一応これはこういうことだということで皆さんから御感想あるいは解釈もいただきましたので、先に進めていきたいと思います。

今日は、ここから本番なのですけれども、変化、下降、下がっているやつが2つと、上がっているやつ1つと、あとずっと低いもの、特にこれについては何とか終わらせたいなと思っています。

では、本題に入りましょうね。議題的には分野別実感の分析についてですね。

では、お願いします。

○松本政策企画課特命課長 第1回資料の資料8です。その前に前回の部分ですけども、第1回資料の25ページです。前回n値があった方が分かるのではないかとということで、25ページ、あなたが幸福かどうか判断する際に重視した事項ですが、全員から取っていたので、n値を568と補足調査の人数を追加しました。また、その他と不明を一番下にしました。結果は同じです。

○吉野英岐部会長 同じ。

○松本政策企画課特命課長 はい。資料8、99ページです。まず、この資料8は事務局で考えた変動要因の推定になりまして、一番右の実感が上昇した要因の推測、100ページに行きますと、実感が低下した分野の要因の推測で一番右ですが、その前に資料8―1から8―3を参考に99ページ、100ページを作成しておりますので、先に資料8―1から8―

3を御説明したいと思います。

まず、資料8—1ですが、105 ページです。補足調査で感じる、感じないということど丸をつけていただいております。例えば「心身の健康」で105 ページで右に見てみると、令和5年に感じる、やや感じる、どちらともいえない、あまり感じない、感じない、それぞれ丸つけていた方がおまして、その人が令和8年にどうなったかというのがこのマトリクス表です。例えば令和5年にどちらともいえないと回答した方が6人いまして、回答した方が全部で143人、令和5年にどちらともいえないけれども、令和8年に感じると回答していた方が6人です。例えば令和5年に感じると回答していましたが、令和8年にはどちらともいえないと回答した方が9人と見るものです。白抜きになっているところは、両方感じる、感じる、やや感じる、感じるで、意見が変わっていない人。黄色に塗ってあって、斜め、斜字になっているところが令和5年から比べたら実感が上昇している人、例えばやや感じるが感じるになった人、感じないがやや感じるになった人、青い網かけで太字になっている方が、令和5年に比べて令和8年が実感が低下した方です。それらの合計を取ると下に書いていますが、①実感が上昇した人は135人、変化なしの人が266人、実感が低下した人は113人いました。

「心身の健康」は少しやり方が特殊です。まず「心身の健康」で実感が上昇、変化なし、実感が低下をそれぞれ判断しまして、からだの健康では、実感が上昇した人の中から感じる、やや感じると令和8年に回答した人をからだの健康が上昇したと判断しています。また、「心身の健康」で実感が低下した人の中で、感じない、あまり感じないと、からだの健康、こころの健康で回答した方を実感が低下したとして、この表にある人数をそれぞれの回答値にしております。

1 ページめくっていただきまして106 ページ、今解釈した実感が上昇した人、横ばいの人、低下した人はそれぞれどういう要因ですかと聞いた上位3つが上の表になっておりまして、それぞれの回答数は下の棒グラフです。例えばからだの健康で実感が上昇した人は、睡眠・休養・仕事・学業・運動などのくらしの時間配分（ワークライフ・バランス）がうまくいっていると回答した方が一番多いということです。実感が低下した人の中では、持病の有無が一番多いので、持病がなかったけれども、あるようになってしまったという方の回答が多いということです。

また、107 ページに進んでいただきまして、今お話ししたグラフのそれぞれのデータです。パーセントとそれぞれの何件という数字が書いています。一番下は、上昇データで、その他もありますので、その他を選んだ人のコメントを抜き出して記載をしております。

108 ページはと、こころの健康の表とグラフ、109 ページがそのデータです。

110 ページに進みますと、今回が実感が上昇した「余暇の充実」についてです。実感が上昇した人は、109 ページで見れば黄色の斜字のところで、173人いて、実感が低下した人は107人おりました。

111 ページに進みますと、実感が上昇した人の回答で自由な時間の確保が一番多いですし、次が家族との交流、趣味・娯楽活動の場所・機会が多いと。この辺が要因ではないかと推測でき、99 ページからの表にその辺を載せています。

さらに進んでいただきまして、例えば今回「地域の安全」が低下した分野ですけれども、128 ページが「地域の安全」の分野の分布表です。この分布表で実感が上昇した人が100人、

低下した人は109人でして、実感が低下した人の回答では、野生鳥獣の出没状況と回答をした方が一番多い。それから、自然災害の発生状況、犯罪の発生状況が1位、2位、3位になっておりました。そのデータが130ページとなっています。

少し飛ばしまして、資料8-2は、それぞれ有意差が見られた属性です。前回御説明しましたがけれども、第1回の資料29ページをお開きいただきますと、黄色く色が塗ってあるところと青い色が塗ってあるところがあります。例えば実感が上昇した「余暇の充実」ですが、29ページでは余暇の充実が左から3番目にありまして、黄色く色が塗ってあるところは県計が分野で上昇したところですがけれども、縦に見ますと男性、女性、20代、70歳以上、臨時雇用者などがずっと黄色く塗ってあり、有意に上昇していると判断されたところでは、それらの分野別実感の回答結果、感じる、やや感じるの人、あまり感じない、感じないの人がどういう回答を寄せているかを表にしたのが143ページからです。

143ページに戻っていただきまして、例えば男性では自由な時間の確保、家族との交流、趣味・娯楽活動の場所・機会をやや感じるとの回答が多かったものです。

144ページにいきますと、そのデータ、パーセントと件数です。

145ページは「余暇の充実」の女性です。147ページは20代、149ページからは70歳以上で、「余暇の充実」の有意に変動した部分、分野と属性の回答を載せています。それが166ページまで、167ページからが「歴史・文化への誇り」も有意に上昇していましたので、その中でも有意に上昇した属性の回答を載せています。例えば167ページは、「歴史・文化への誇り」で、女性が優位に上昇していましたけれども、「地域のお祭り・伝統芸能」が一番回答が多く、「その地域で過ごした年数」、「地域の食文化」という順で回答数が多くなっています。

「歴史・文化への誇り」としましては、178ページの沿岸広域振興圏までです。

179ページからが実感が低下した分野で、「地域の安全」だけでした。さらに、その中で属性別に低下していた属性が50から59歳で、その感じる、あまり感じないという回答を表と図にしたものです。「地域の安全」の50代、野生鳥獣の出没状況が一番多いですし、地域の防犯体制が次に多い。犯罪の発生状況が3番目です。それから、居住年数20年以上や県南広域振興圏で今の表は以上です。

また、資料8-3は実感が上昇した方、横ばいになった方、実感が低下した方、全てにおいて具体的な要因を書いていた内容をここに記載しています。からだの健康、こころの健康では、例えば実感が上昇した「余暇の充実」が189ページですが、自由な時間の確保では、実感が上昇した人、自由に過ごせる時間があるとか、夫も勤務していて自由時間は多いとか、自由な時間があって気持ちも安定しているなどの回答がありました。

また、216ページですが、例えば「地域の安全」は実感が低下していましたが、1番の犯罪の発生状況の実感が低下した人の回答では、以前隣のアパートにいた方が窃盗で捕まったとか、219ページの自然災害の発生状況では、津波浸水区域だからとか、大雨が降ると泥などが流れてくるなどです。野生鳥獣の出没状況、221ページですけれども、熊対策やイノシシなどの回答がありました。これが全ての分野について239ページまであります。

これらをまとめまして、また99ページに戻っていただきまして、実感が上昇した分野、「余暇の充実」がありましたので、第1回資料の29ページとか34ページを見ていただくと、ここの次の隣の欄ですがけれども、実感が上昇した属性は男性、女性の20歳から29歳、

70 歳以上などが実感が上昇した属性として挙げられています。基準年に比べておおむね 0.2 点以上高くなった属性を上昇幅が大きい属性とし、二重丸をつけました。その隣ですが、110 ページからで要因の抽出を行い、補足調査結果から実感が上昇した人の上位 3 位の回答を並べています。「余暇の充実」であれば自由な時間の確保、家族との交流、趣味・娯楽活動の場所・機会、1 位、2 位、3 位でしたので、それを並べています。また、実感が低下した要因と比較して、上位 3 位以内で回答割合が高い回答と書きましたけれども、実感が上昇した回答と実感が低下した回答を比べて 10% 以上開きがあるものをここに記載しています。10% 以上低下との差があったのが知人・友人との交流でしたので、それを記載しています。それらを右側の実感が上昇した要因の推測のところに記載しています。自由な時間が十分に確保できたこと、家族との交流が増えたこと、趣味・娯楽活動の場所・機会が増えたこと、知人・友人との交流が増えたことが実感が上昇した要因として推測できます。

例のところでは、一番最後にお話しした資料 8—3 にありました自由記載に書いてあったものを少しだけ抽出しています。

「余暇の充実」としては以上の説明になります。

○吉野英岐部会長 では、今実感が上昇したところと低下したところ、2 つ、1 つについて背景も含めて御説明いただきました。

では、最初の実感が上昇したところ、「余暇の充実」について、この回答者の要因分析並びにこの結果について御意見があればお願いしたいと思います。

和川委員どうぞ。

○和川央副部会長 まず、まとめ方についてはこれでよろしいかなと思います。特に事務局からの案に対しては疑義ありませんというのが 1 つです。

質問として、時間自体は余暇時間は増えたのでしょうか、横ばいだったのか、低下しているのか、県民意識調査全体の方ですね、まずそこの数字の確認をさせてください。

○吉野英岐部会長 では、調査統計課からいきますか。令和 7 年に比べて令和 8 年の余暇時間の推移。

○小原調査統計課調査担当課長 今日お配りした資料の 4 ページを御覧いただければと思うのですが。

○吉野英岐部会長 4 ページ。

○和川央副部会長 右側に前回の入っていましたね、失礼しました。今年だけだなと思って見ていたのですが、であれば横ばいだということですね。

○小原調査統計課調査担当課長 横ばいということで、はい。

○和川央副部長 分かりました。ありがとうございます。

では、最後に単なるコメントになります。例えば 77 ページを見ていただくと、自由時間については、まず時間を確保することが大切なのだよということがわかります。一方で趣味・娯楽、家族との交流、知人というのが 4 割、5 割、3 割とそれなりに占めているので、自由時間が大切とはいいつつも、時間だけではないのだよねと、自由時間を充実する目的が必要なのだよねという結果は今回も同じだったのかなと思います。

ここでは示さないのですが、後ろの方には 40 歳代、50 歳代の結果が出ていますが、そこであまり感じない人というのは時間が 70% ぐらいで突出しているのです。ただ、40 歳代、50 歳代はどうやら時間がないことで余暇が充実していないらしいというのがそこから推測できるかなと思うのです。一方で 70 歳代のところが 149 ページで、今回上がった人たちということなのですが、73.4、ここは時間がそうなのですが、気になるところが 2 番ですね、運動や行動の制限の有無というのが平均大体 23% なのですが、この世代は 34%、10 ポイント上がっているのです。なので、健康であることが余暇を充実することに実は結構大切なことなのかなと思うのがここから推測できるかなと思います。一方で、あまり感じないと言っている人は 2 割の人たちは、実はここ健康ではないことが 70 歳以上になると余暇を充実できていないという可能性もあるので、実は余暇というのは、政策分野が健康・余暇とくっついているように、健康というのはやはり大切なのだなということもそこから見て取れるかなと感じました。

以上、コメントになります。

○吉野英岐部長 ありがとうございます。年代によって、要因が違うのではないかとのことですね。ありがとうございます。

そのほかお気づきになった点があればお願いします。20 代が多いんですけど、前年に比べて、感じる人。若者。

○松本政策企画課特命課長 はい、前年に比べて 20 代は大きく上昇しています。34 ページ。

○吉野英岐部長 これなんですかね、働く時間が短くなって、楽しめる時間が増えたとか、そういうことですか。

○和川央副部長 147 ページです。

○吉野英岐部長 147 ページ、感じると答えた人と自由な時間の確保 19 名でいるうち、ほとんど若者とかそういうこと、そんなことはない。

○松本政策企画課特命課長 147 ページの 19 名は全員若者ですね、10 代なので。

○吉野英岐部長 その後のページは、70 歳以上。

○松本政策企画課特命課長 はい、70 歳以上が「余暇の充実」では。

○吉野英岐部会長 でも、そんなに突出して自由な時間が確保できているというのが若者のみに該当するわけではないということですよね。

○松本政策企画課特命課長 そうですね、はい。

○吉野英岐部会長 60 歳以上の人は自由な時間はもともといっぱいあるのではないのかなと思ってはいけないのですか。

○和川央副部会長 これサンプル数が 19 しかないので、これをどう読むかというのは注意が必要なのですが、平均がここ 71%なのです、自由な時間の確保で満足していると答えた人が。15 ポイントの差が出ているので、そういう意味で若い人たちがここで満足感を感じているというのは言えるのだろうなと。そして、この趣味・娯楽のところの平均が 40%ぐらいしかないのが 54.5 になっていますので、ここも 15 ポイントぐらい若者が高いので、若者が時間と遊び、分かりやすいなという、そういうところが見て取れるかなと思います。

○吉野英岐部会長 高齢者は。高齢者も時間は時間。

○和川央副部会長 高齢者は時間もなのですが、運動や行動の制限の有無が高いのですよね、平均に比べて。だから、健康であることがやっぱり余暇を過ごすその属性の一つの基礎、基盤になっているのかなと推測できますし、もう少し丹念に見ていくと知人・友人なんかも結構高かったりするのです。一方で、感じない人たちは知人・友人で感じていなかったりするので、やっぱり高齢者と交流というのはそれなりに「余暇の充実」に関係しているのかなというのは何となく推測はできるかもしれないと思っております。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。時間は時間でどっちも大事なわけけれども、その後健康なのか、娯楽なのかみたいな感じがすると。
はい、どうぞ。

○蛸崎奈津子委員 すみません、今の和川さんのお話と関連するのですが、107 ページを御覧いただきたいと思います。御高齢の方が健康と余暇が関連するということなのですが、この 107 ページの実感が上昇した際のコメントとして、先ほども御紹介いただきましたが、持病があっても不自由なく暮らせているというところで、恐らくこれから高齢化が進行しますと何かしら御病気をお持ちの方が増えてくると思いますが、病気がないことが大事というよりは、持病があっても不自由なく暮らせているというような視点で考えていくということが大事なのかなというところを感じましたので、先ほどの和川さんの意見にそのとおりだなというところを思ったところです。

○吉野英岐部会長 不自由なく暮らせているということは、自由に暮らせているというこ

とですか。

○**蛸崎奈津子委員** 支障なくという感じですかね。

○**吉野英岐部会長** 支障なく。余暇やるにも支障がないということですかね。

そのほかいいですかね。いいですか、ここまで。

どうぞ、谷藤委員。

○**谷藤邦基委員** 今皆さんのコメント全くそのとおりだなと思っております。私は来年の10月で70になるので、ある意味そういう予備軍なのですが、やっぱり時間があっても使える時間だと言われれば使える時間なのだけども、体の動きが悪いのです、やっぱり年取ると。だから、1時間がみんな同じではないと思っていただいたほうがいい。

あとは、資料8―3のコメントの方をいろいろ見ていて、ちょっと思ったのは結構お金の問題を挙げているコメントが、そんなに多いというほどではないにしてもちらほら目立つなど。

あともう一つ、熊ですね、この関係であまり外に行かないようにしているようなコメントも若干出ている。だから、この全体の数字が改善傾向にあるというか、実感が上昇していることはいいことだし、ポジティブに評価したいと思うわけですが、一方でちょっとそれを阻害する要因というのもそれなりがあるので、この辺はこの先気をつけていかなければならないところかなと思って見ていた次第です。

以上です。

○**吉野英岐部会長** ありがとうございます。

ほかにありますか。

県庁としては、「余暇の充実」に向けた政策というのはどんなのがあるのですか。

はい、どうぞ。

○**佐藤政策企画部副部長** そのものずばりではないのですが、働き方改革とかによって時間をつくるということで、「余暇の充実」、趣味とか何かを増やすということに対しては政策的にはあまりないので。

○**吉野英岐部会長** 余暇に使う時間にかかるお金をどんどん補助するとかそんなことはない。

○**佐藤政策企画部副部長** ないですね。

○**吉野英岐部会長** なさそう。そうしたら、働く時間を減らすことによって、それ以外の時間を増やすと。

○**佐藤政策企画部副部長** 増やすということだけというような。

○吉野英岐部会長 これは何課がやるのですか、「余暇の充実」というのは。

○佐藤政策企画部副部長 仕事でいえば商工労働観光部になりますし、あとは育児の関係でいえば保健福祉部がやるというような感じです。

○吉野英岐部会長 これクロスファンクショナルでいうと結構入ってくるわけですか、この分野、県庁の部局が多い。

○佐藤政策企画部副部長 そうですね。多いですね、関係してきますね。

○吉野英岐部会長 生涯学習とかそういうところも入ってくるのですか。

○佐藤政策企画部副部長 生涯学習ありますね、おっしゃるとおりです。生涯学習は、こちらは余暇時間を使うということだと思いますけれども、やっていました。

○吉野英岐部会長 そこがより活発に県民が参加してくれていれば、ある意味効果が上がったということですかね。

○佐藤政策企画部副部長 そうですね、そのとおりです。

○吉野英岐部会長 なるほど、分かりました。悪いことではないと思いますけれどもね。では、もう一つは、「歴史・文化への誇り」ですね。ここに書いてあるとおり。

○松本政策企画課特命課長 ここに書いてあるとおりなのですが、一応御説明いたしますと、99 ページの下の段落です。同じように県民意識調査で実感が上昇した属性は、前の43 ページなどに書いていますが、女性、20 代、臨時雇用者などで、実感が上昇した上位3 位の回答では、138 ページに書いていますが、地域のお祭り・伝統芸能、その地域で過ごした年数、地域での文化継承・保存活動、それから 10%以上、回答割合が高いと、低いものに比べて高いものが世界遺産があることと地域の食文化がありましたので、それらを右側の実感が上昇した要因の推測に記載しております。同じように、例には資料 8—3 の自由回答欄、231 ページとか 232 ページなどに書いてあるものから少しピックアップして、そこに載せています。

以上でございます。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。増えるのは、これまたいいことなのですが、何でも、何で増えたかと言われると困りますね、伝統芸能・お祭りなんて急に出来たわけではないし。

どうぞ。

○渡部あさみ委員 それについては、思い浮かんだことがありまして、私はこの間の土曜日に生まれて初めてさんさの練習会に。

○吉野英岐部会長 大学で。

○渡部あさみ委員 いいえ、子供たちが行きたいと言って、地域の体育館であったので。「まずは見学です」と言って入ったのですけれども、「お母さんも一緒に踊って歩かないとはくれるよ」と言われて、いきなり私も「2番」とか言われて、何で2番なんだろうとか思いながら参加したのですけれども、結構できる方が多くて、何でそんなにできるんですかということを聞いたら、会社で出ていると。その後は、子育てを理由にさんさには参加していないけれども、子育てを理由にまた参加するのだということで、この時期に企業なり地域のつながりで伝統芸能に参加される方というのはもしかすると一定数いらして、それがここに出ているのかなと読み取れました。あとは、大学のサークルとかでも結構本腰入れてやっていらっしゃった方もあるので。

○吉野英岐部会長 まあ、ある、大学とかね。そうすると、20代は有意に高いけれども、結構子育て世代もそうやって誘われたら感じられるようになるかもしれないということですかね。

○渡部あさみ委員 だといいですね。

○吉野英岐部会長 私はそうでしたと。分かりました。「歴史・文化への誇り」、誇りを実感できるというのがですね。

はい、どうぞ。

○和川央副部会長 ここにつきましても私も事務局の整理でいいかなと思っています。なので、ここもコメントなのですが、今御指摘いただいた95ページを見ると、私は政策としてどう考えるかといったときに、このあまり感じない人をどうやって左側にシフトさせるかというところを考えたときに、ここは比較的明確で、先ほど委員長もおっしゃったように祭りを新しくつくるということではなくて、見当たらない、関心がないという人に関心を持たせる、要はPRをする、体験させる、まさしく先ほど渡部先生おっしゃったように何かのきっかけで体験させるというところとか、そういうのが多分今後やっていくものなのかなと思います。お祭りというのは一種の公共財と言われるもので、私が見ているお祭りと、ほかの方が見ているお祭り、基本的に同じものなわけですね。子育てとかの環境は人それぞれ違うのですけれども、お祭りとかというのは基本的に同じものを見ているはずなのだけれども、評価が違うということは、そもそも見方が違う、あるいは見ていないということなので、そこを満足するような形で見てもらう、見方をちょっと考えを変えてもらうという行動を促すのが一つ政策として可能性があるかなと感じています。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

ほかにありますか。
では、谷藤委員どうぞ。

○谷藤邦基委員 私もこの事務局の整理で、これでいいのだろうと思っています。実感が上昇したというのも結構なことで、例によって懸念されるところをちょっと言わせていただくと、これもコメントを見ていて思うところなのですが、人口減少なり少子化といったことの影が、特に伝統芸能の承継というあたりについて懸念される材料として出てきているかなと思うところです。さんさに関していえば、これはかなり地域を挙げて参加するものになってきているので。

ちなみに、渡部先生のお子さんは小学校でさんさの練習とかはしていないですか。

○渡部あさみ委員 小学校ではやっていないです。

○谷藤邦基委員 そうですか、うちの子供のときはあったのですよ、運動会でやったりしていた。町内会から太鼓借りて太鼓をたたいたりしてやっていたような時期がありますね、20年はたっていないけれども、15年ぐらい前かな。あと町内会自体が、私の入っている町内会自体が隣の町内会と組んでチームつくって出たりしていますので。

○渡部あさみ委員 多分同じだと思います。

○谷藤邦基委員 私は1回しか出たことないけれども、もうとても年だから無理なので。だから、それぐらいのレベルになっていると、盛岡はまだまだ、人口が減っているといってもそれなりの人口がありますので。ただ、それ以外の地域ですと、そもそも担い手がいなくなってきているよというようなところも結構出てきていて、そもそも学校自体がなくなる傾向にあるわけなので、そこら辺をこの先どう考えていったらいいのかというのはなかなか難しいところかなと思って見ていたところです。

ですから、人口減少の問題というのは次の地域の安全なんかに関わってきますけれども、結構いろんなところに影を落としてきているかなと思っているところではあります。
以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。
どうぞ。

○渡部あさみ委員 今回私と子供たちがさんさに参加するきっかけとなったのが学校からのお便りだったのですけれども、ここから先がちゃんとここで言うべきことだったと反省しているのですが、小学校の方でコミュニティースクールとしての役割を持とうということで、地域と小学校の関わりを持つ時間をつくったのですけれども、そこでさんさということ、さんさやっているからぜひみんなに参加してほしいということを学校を通じて伝えてもらおうというようなお手紙を出したのです。それによって、結構参加者が増えたのだというようなお話伺って、これというのはほかの地域にも今後伝統芸能であったりとか、地

域の交流を深めていく上でも援用できるような事例なのではないかと思いましたが、あとは私自身が企業経営のことを研究しておりますので、企業の社会的責任ということを考えたときに、企業が見ているのが地域社会であるというようなこと、2000年代以降強く言われるようになったので、企業も地域社会にとってどういう貢献ができるのかだけではなくて、一市民として以下に善良な市民になるかということを模索する中で、こうした伝統文化であったりとか地域社会を盛り上げていくという上での企業の役割も大きいというか、期待されるのではないかなと考えております。

以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。学校のクラブの地域化というのが今、学校で抱え込まないでクラブ活動、地域に受け皿があればですけども、というのとか、今おっしゃった地域というか、企業の社会的責任という観点からも、こういったものに積極的に出るようにというようなことも寄与しているのではないかと。

○渡部あさみ委員 はい。

○竹村祥子委員 ちょっと長い目で見たとときに、1つは地域の歴史や文化ということは、全県ですから震災後、沿岸は特に祭りの復活で地域復興しようという運動というより盛り上がりがあったと思うのです。実際の建物や生活の復興だけではなくて夏祭り、とにかく家が流れた後であっても、そこに立って屋台を迎えるということをやっていたというのを思い出して、そう考えてみると15年たって祭りが復興したということはその地域の文化が前と同じようなところへ戻ってきたという実感がやっぱりあるのではないかと思います。と同時に、盛岡はもちろん渡部先生のおっしゃるように地域づくり、そういうことと、この伝統の話というのが一緒にまた教育の場面で復興なり、復興というよりは、更新されるということはあるかもしれないのですけれども、同時に全県の方を見ると地域のつながりは一旦落ちてあんまり上がっていないのですよね。コロナのときにもう一つ地域のつながりが絶たれたわけで、だけれどもそれが必ずしも幸福実感で悪い方ではなかった。これあんまり活動しなくても何とかなるのだというようなところで、実感が下がらなかったというのが実際あったと思うのです、令和2年、3年くらいのときにね。だから、このところはもちろん政策としては地域の歴史や文化の誇りということと地域のつながりということは一緒に上げていくという政策は重要だと思いますけれども、ただ両方が一緒に上がるとは限らないということもやっぱりデータは示しているということを忘れてはいけないのではないかと思います。ちょっと長い目で見たとときにそう思いました。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

ほかの方がいますか。

はい、どうぞ。

○渡部あさみ委員 去年結構県の政策資料とかで出てきたアンコンシャス・バイアスでこの問題を考えるときに、すごく有用な概念なのではないかと思ってしまして、文化の継承

ということになると、地域社会とのつながりということも増えてくるかと思えますし、それに関わり続けるということを考えたときに、退出するような要因をできるだけ減らしていくということを考える必要があるかと思えます。

今日カラーで頂いた資料の中でも、何ページでしたっけ、53 ページのところに家事シェア大作戦ということが紹介されているのですが、ジェンダー平等ということについては、結構小さな組織内において議論がされる。例えばここでいうと家庭内の話であったりとか、学校でいうと教室内の話というようなことが多いように感じるのですが、地域の中でのそういったジェンダー平等というものをいかに啓発して実行に移していくのかということについても議論すべき段階に来たのではなかろうかと感じました。

私からは以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございました。

ほかにありますか。歴史・文化というと、普通は文化財であるとか、世界遺産というようにちょっと広めのものを通して感じるものと、つまり広い価値を持っているものもあると思うのですが、今日の例示で挙げられている伝統文化やお祭りというのは、ある意味地域ごとにあって、基本はそこにいる人が参加をしていて、楽しんでいるというようなタイプのものだとすれば、「歴史・文化への誇り」を感じるということが地域社会とのつながりを実感できるということと結構つながっているところもあるのかな。実際それがうまく連動しているかどうかは、ちょっともう一回データ見なければ分からないのですが、広い一般の歴史や文化というよりは身の回りにある歴史・文化的な要素あるいは活動に自分も誇りを持って参加しているということになると、そのもし相関が見られれば、やっぱりその地域社会のつながりに対して一定の関係性、「歴史・文化への誇り」というものがあるのかなとちょっと今思ったのです。逆にあんまり相関が見られないという結果が出れば、やっぱり違うのかという気もしないでもないのですが、お話を聞く限りはそこはつながっているような気もするので、これ項目間のあれ取れるんでしたっけ、相関関係というのは、項目というのは分野間。

○松本政策企画課特命課長 はい、取れるかと思えます。

○吉野英岐部会長 もし取れそうであれば、ちょっとこの2つの分野は近い、3.1 幾つ、3.2 幾つなのですね、実感の平均値が。似たような動きしているのですが、地域社会についてはちょっとずると、そんなに落ちてないけれども、ちょっと低めになってきたということですね。

一方で、伝統文化が有意にちょっと上がったということですね、誇りが。だから、それは地域の方に反映しているのかどうかちょっと分からないのですが、何かつながりが、特に岩手の場合はありそうだなという、地域ごとにいろんな活動を持っている傾向が非常に強くて、さんさはもちろん盛岡だけれども、さんさ以外のいろんな活動も、鬼剣舞であるとか、ほかのもそれぞれの地域でお子さんや保護者を集めて活動していることを考えると、両方相乗効果みたいなものも出てくるかもしれないというのをちょっと感じたので、もし分析可能なら分野間の相関を取ればちょっと見せてほしいなと思いました。

どうぞ。

○蛸崎奈津子委員 今のにも関係するのですけれども、ぜひそのときに性別の違いも見ていただけるといいなと思いました。理由としましては、99 ページのところで、私、そういえば意外だなと思ったところとしまして、ここで性別で女性というところが出ているのですけれども、私は他県から来ておりますので、いろいろ岩手県で放映されるお祭りの番組とか見ていますと、さんさ以外の。割と男の人がよく主人公になって継承を担っているなというところで報道されていることが多いのですけれども、一方でここで女性の人が出ているので意外だなというところで、実際に見ているとお食事ですとか、準備ですとか、いろんなところで役割は担って、隠れた役割は担っていらっしゃるのだらうなというところがあったのですけれども、そういった中でも女性としては関わるのが評価しているといえますか、よいものだと実感しているというところで、この点は非常に興味深いなということを感じたところでした。

○吉野英岐部会長 性別も取ればぜひね。最近では背に腹は代えられないと、誰でもいいからどんどん入ってくれと、昔は男しか駄目でしたけれども、そんなんではもたないからと、大分ここ数年どこでも増えてきて、そういうこともあるのかもしれないですね、どんどん入りやすくなってきたというのはあるかも。さんさはもともと女子入っていますけれどもね、入っていないのもあるので、芸能によってはね。

分かりました。ありがとうございます。

○蛸崎奈津子委員 性別のところを1つ追加すると、やはり男性の方が孤立しているというようなのが多いと、世代的なところもあるかもしれないのですけれども、ありましたので、そういう点でもちょっと関心があるなというところでした。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

高い方はありがたいのですけれども、低い方もあるので、低下している方について。

はい。

○松本政策企画課特命課長 引き続き 100 ページです。地域の安全が低下している、基準年令和5年に比べて低下しておりました。低下した属性は御覧の3つ、50代と20年以上と県南広域振興圏です。要因の抽出は、今までは上昇でしたが、こちらは低下した人の上位3位の回答を抜き出したものです。野生鳥獣の出没状況と、自然災害の発生状況と、犯罪の発生状況でした。その他で上昇と比較して10%以上高かった回答はありませんでしたので、一番右の実感が低下した要因の推測にはその3つを記載しておりまして、資料8—3の自由回答欄に書いてあるものを少し抜き出してここに例として載せています。

以上でございます。

○吉野英岐部会長 ここは常々話題になるところですけれども、実感が低下している要因をこのようにおまとめいただきましたけれども、これについてまた御意見があればお願い

したいと思います。まあ、そうだよなという感じの要因ではありますけれどもね、これ以外にも何かお気づきの点とかもあればと思います。これほぼ全部減るんですけど、どのクロスで見ても低下。

○松本政策企画課特命課長 地域の安全の属性ということでしょうか。

○吉野英岐部会長 うん。

○松本政策企画課特命課長 属性は全部減っているわけではなくて、ここの一番左にもありますけれども、29 ページを見ていただきますと地域の安全はこの青く塗ってあるところが属性では低下しているところです。

○吉野英岐部会長 そんなには。

○松本政策企画課特命課長 はい、そんなには、全部というわけではないです。また、具体的な数字でいきますと、40 ページを開いていただきますと、令和 5 年がこのぐらいの数字で、令和 8 年はこのぐらいの数字になっていますというのが分かるかと思います。

○吉野英岐部会長 全部落ちるのが平成 31 年と比べるとほぼ全部落ちてしまうと。

○松本政策企画課特命課長 ええ、そのとおりです。

○吉野英岐部会長 令和 5 年と比べると一部での低下が見られる程度であるということですね。

○松本政策企画課特命課長 はい。

○吉野英岐部会長 どうぞ。

○和川央副部会長 ここについても事務局の整理で私も特に異議はないかなと思っていきます。129 ページで全体の 89 ページを見ると野生鳥獣で 67%、それ以外は 2 割台ということなので、ほぼほぼ野生鳥獣で、みんな感じない、低下しているだろうというのもそのとおりだと思います。

ただ、ちょっと気になるのですが、実感が低下した分野で、179 ページから実際に低下した分野の属性別のものが 179 ページから出てきているのです。これも 50 歳から 59 歳のところを見ると、そのとおり 14 の野生鳥獣が伸びているのですけれども、例えば犯罪の発生状況というのは、これ全部平均すると 21%なのですけれども、この年代は 26.7%、あと地域の防犯体制も全部で見ると平均が 29%なのですけれども、33%、あんまりサンプル数は多くないので、あれなのですけれども、必ずしも野生鳥獣だけではないところにも反応しているなというのはちょっと懸念というか、サンプル数少ないので、それほど明確で

はないのですけれども、野生鳥獣一点張りではない可能性もあるかなという気になっています。

一方で、その次の次の 183 ページを見てみます。183 ページが県南なのですけれども、県南を見ると野生鳥獣がボーンと突出しているので。そして、ほかは大体平均と同じレベルなので、県南地域は多分野生鳥獣が今回は効いていたのかなと推測ができるかなと思います。

ただ、いずれもサンプル数少ないので、あくまでもこんな感じかなという程度のお話ではあります。

○吉野英岐部会長 あんまり感じない人って多くないですよね、ここね。全体高いんだよね、評価、実感が。そうかなという気もしないわけでもない。昨今のニュースを見ていると、毎日やられそうな気がして恐ろしいのですけれども、それは昨今であって、1 年前では。でも、これ 2 月でしたっけ。

○松本政策企画課特命課長 はい、1 月。今年の調査です。

○吉野英岐部会長 この頃というのは、結構報道ありましたよね、たしか。

○松本政策企画課特命課長 冬なので、今ほどではなかったでしょうか。1 月なので。

○吉野英岐部会長 何か冬眠しないやつがいるとか。だから、マスコミの報道効果もあったような気もするけれども、それほどでもないのかという気も。3.6 ですものね、しかも。高いのですよね、安全のところについては評価が。下がりつつあったとしても、「収入・所得」みたいにずっと低いというわけではなくて、安全なのですかね、やっぱりね。

どうぞ。

○谷藤邦基委員 現実に安全かどうかというか、安全と感じているかどうかなので。ただ、実数としてやっぱり水準として高いのは高いですよね。だから、問題は、じわじわ下がってきたかなと思われるところが問題なのであって、これ野生鳥獣はここ数年で出てきたところで、以前であれば別な要因で下がったりということはあったように思うのです、自然災害だとか、集中豪雨というか、そういう洪水被害みたいなものが起きたりとか。

ただ、一方で私は、ここに限らない、この問題に限らないのですが、全般通じて思うのは、主観的幸福感なり分野別実感というのは、半径 5 メートルの問題になっていると思うのですよね。だから、自分の身につまされるところまで来て、初めて何か実感が動くところだと思うのです。だから、これらの問題も野生鳥獣という、最近特に指摘する声、上がる声が増えたというか、昔は選択肢になかったというのでもあるのですけれども、最近の問題で結構まち中にも出てきている。実際私がここに来るのもちょっと怖い思いを持ちつつ中央通は通らないようにしようとか思いながら来ているわけなのですけれども。

やっぱりそういうことで、身近な問題になってくると実感に影響が出てくるということはあるのかなと。だから、結構半径 5 メートルという言い方はかなり俗な言い方で、多分

心理学とか行動科学みたいなところできちんと定義はされていないと思うのですが、ただ俗世間的には結構半径5メートルという表現使われていますよね。だから、そういう問題、要は身近な問題になっているかどうかというところで、半径5メートルで安全でないと感じる人が増えてきているということが問題なのかなと思っています。身近な不安として感じられるレベルになってきたということは間違いないので、この先気をつけなければいけないところなのだろうなと思っています。

あと、さっき人口減少の話もしましたが、やっぱり熊とか野生鳥獣が増えてきたというのは、人間が減ってきたので、勢力争いで熊に負けてきたのだということを言う人がいて、そうかもしれないなと思うところもあります。だから、いろんなところに人口減少の問題というのは影を落としてきているなという感じは受けているところです。

ちょっと先走った話になりますけれども、この先、次の県民計画長期ビジョン、3年後を今つくるのでしょうから、そうすると我々の活動は来年で終わるかもしれないけれども、それに向けて私自身も長期的にどう考えたらいいのか、長期的な課題とは何かというのをこの先洗い出すような作業を来年度中心にやっていく必要があるのかなと思っています。そんなに頻繁に動くものでもないというか、細かく動いたとしても、それは攪乱項みたいなものであって、例えば「収入・所得」みたいに低位に張りついたままの項目とか、ある程度高い水準を維持できているものとか、それを維持するにはどうしたらいいか、あるいは低位のものを上げるにはどうしたらいいかというようなものを何か課題の洗い出しみたいなことが私たちの仕事として最後にやらなければいけないことかなと、次の長期ビジョンというか、多分つくるでしょうから、もう作りませんという話だったら別ですけども、そんな感じをしておるところです。

あともう一つ、ここでちょっと意外に思ったのは、意外と去年の大船渡の山火事というのは影響がなかったのかなと。ただ、その後大槌の山火事起きましたし、昨今岩手県以外でも結構山火事が起きていますね。昨日も広島、福山でしたっけ、山火事が起きていました、福山かな。今日あたり鎮圧しそうだ、できそうだという話にもなっているようですけれども、いずれ地域の安全というのはそのときのテーマが違うのです。違うテーマで実感が下がってきている。だから、また新しいテーマが出て、テーマという言い方はちょっとよくないかもしれませんが、いろんな関心事が変わっていくところがあるので、ここは気をつけていかなければいけないところ。なおかつ半径5メートルという言い方との絡みでいうと、ここが一番行政が関われる部分で、ほかは本当に半径5メートルの問題で家族関係なんかには行政が関わるわけにはいかないというか、何か問題が起きてからなら関われるけれども、前もって関わるわけにはいかない分野でもあるから、そう思うとここは本当に重要な分野かなと思っています。

以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。ほかはいいですか。

では、こういった方向のまとめを進めてくださいということにしましょう。

では、続いては低い、高い。

はい。

○松本政策企画課特命課長 調査開始からずっと高いもので、101 ページです。その根拠資料は資料 8—4、241 ページからです。まず、241 ページ開いていただきますと、先ほどまでと同じですが、ずっと高い分野別の回答結果です。ずっと高いのが「家族関係」＜夫婦のみ＞と、自然のゆたかさなのですが、属性別で載せています。自然のゆたかさは全部の属性が高いので、分野別実感の回答結果をそのまままた再掲という形で載せています。

101 ページに戻りまして、分野別実感で家族関係の世帯構成は夫婦のみはずっと高いです。補足調査の結果から、推測ですけれども、今お示したところで買い物頻度が多いことと同居の有無、困ったときに助け合えるかどうか上位 3 位までの結果となっています。下の表にありますけれども、過去から比べると同じ傾向にあるので、一番右のまとめで、その 3 つが実感が高い要因ではないかと推測しています。その下の自然のゆたかさと一緒に説明してしまいますと、自然のゆたかさは全部の属性でずっと高い値になっています。高い値というのが平均値で 4 以上です。分野の実感が高い要因としては、緑の量、空気の状態、水で、過去からずっと下の表で見てもその 3 つが高い要因として挙げられておりますので、実感が高い要因はその 3 つではないかと考えております。

以上でございます。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。一貫して高い、一貫して低いところですが、ここについても今の御説明について御意見、御質問あればお願いします。一貫してというぐらいですからね、長期的にという意味とも取れるので、これいづれ先ほど谷藤委員おっしゃったように、なぜ、どうしてこうなるのかというのは、改めてテーマとして掲げて分析することもできるので、今回も低かったというか、今回も高かったということについての要因というか、お答えなさった方々考え方についての整理と受け止めておきましょうか。

では、これはこのとおりだということにして、もう少し進めなければいけないので、次いいですか。

お願いします。

○松本政策企画課特命課長 次は 102 ページです。今度は、継続してずっと低い値が 3 点未満、2. 何点です。属性別で 2. 何点だったところを載せております。「余暇の充実」でいけば、40 歳から 50 歳、それから常用雇用者に 2 世代世帯、子育て世代や子どもはいない、子どもの教育でも子どもはいない、必要な収入や所得では、会社役員、団体役員、居住年数 10 年から 20 年未満を除いたその他の属性で、ずっと調査開始以来 3 点未満です。それがまた同じように資料 8—4 の 245 ページからそれぞれの属性別に集計結果を載せております。感じる、感じないの回答やデータを載せています。

102 ページに戻っていただきまして、それらを見てこの調査において、上位 3 位までの回答として「余暇の充実」では、自由な時間の確保、知人・友人との交流、趣味・娯楽活動の場所・機会が 1 位、2 位、3 位の回答となっておりました。下の表にありますけれども、それぞれ昔から、令和 2 年からの回答結果を並べてみますと、過去 3 回以上属性別実感が低い要因となったものは、同じように自由な時間、趣味、趣味・娯楽、知人・友人との交流でしたので、まとめとしてその 3 つを挙げています。

続けて御説明いたしますが、子育てで子どもはいないということでは、上位3つが子育てにかかる費用、子どもの教育にかけられる費用、子どもを預けられる人がいないというものです。過去3回、下の表にあります、過去で3回以上になったものでは、子育てにかかる費用が高いこと、教育にかかる費用が高いこと、それから令和8年には入っていませんけれども、自分の就業状況、労働時間、休養・休暇などに不満があるという回答が上位3つの過去3回以上の要因に挙げられていましたので、それらをまとめて令和8年、それから過去3回以上をまとめると右の4つになります。子育てにかかる費用が高いこと、子どもの教育にかかる費用が高いこと、自分の就業状況に不満があること、子どもを預けられる人がいないことです。

続きまして、子どもの教育、子どもはいない属性でずっと低い値になっております。令和8年では、上位3つが人間性、社会性を育むための教育内容、不登校やいじめなどの対応、学力を育む教育内容が低い要因となっております。過去3回以上ということでも同じものが挙げられておりますので、一番右でも同じものを挙げています。

必要な収入や所得ですけれども、令和8年は自分の収入・所得額、家族の収入・所得額、自分の支出額が上位3つとなっております。過去3回以上なっているのは、それらに加えて自分の金融資産の額が十分とは言えないことが過去3回以上で挙げられておりましたので、それをを含んだ4つということで右のまとめにしています。

以上でございます。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。ここは4分野ですかね、一貫して低いと。3に届かない。これもまとめていただいた要因について御質問なり御意見なりあればお願いしたいと思います。そうだろうと、ここもそういう要因だろうとということがある程度は推測できますけれども。

はい、どうぞ。

○蛸崎奈津子委員 御報告ありがとうございます。102 ページのところですが、子育てと子どもの教育の部分で、子どもはいない方というところが属性としてはありますが、例えば新婚期といいますか、これからお子さんを持つであろう世代の方がどのくらいの割合で、あとはそれ以外の方がというところを分けて考えると、また施策に反映できるような視点といいますか、読み取りがちょっと変わってくるのかなというところを感じたところです。

○吉野英岐部会長 これあれでしたっけ、子供がいない人の年代というの、つまり若い人たちのいない人たちが低いのか、もう終わってしまっている年代が端から見て低いのかというのはたしか。

○松本政策企画課特命課長 483 ページですが、子育てに関する分野別実感の推移ということで載せております。以前やったものの令和8年にデータを伸ばしたものです。御説明いたしますと、県計は既に出しているものですが、それを男性、女性に分けたものが右の図になっております。令和8年は女性が少し伸びているけれども、男性が少し減少

しています。それから、年齢別に分けたのがその下で、世帯別に分けたのがその右側、それから子どもはいないという属性が、一貫して低いというのがその下です。

○吉野英岐部会長 年齢別に見ると、若干年数を、20代から29歳のこれ、青とか紫の方が、高年齢の方よりも実感が低く出ていると見ていいのかな。

○松本政策企画課特命課長 大体。

○吉野英岐部会長 ですので、これから子育てしようと思う人たちの方が子育て終わった人よりも実感が低い。

○松本政策企画課特命課長 さらに484ページだと、男性、女性で年齢別になっています。

○吉野英岐部会長 結構動きますけれども、これ右が女性ですね。男性も若い人、結構実感が低いでもいいのかな、青とかさっきの。

○松本政策企画課特命課長 はい、そうですね。

○吉野英岐部会長 上がったたり下がったりしつつ。

○松本政策企画課特命課長 低い。

○吉野英岐部会長 でも、低いものは低い。

○松本政策企画課特命課長 はい。70歳以上が高いような。

○吉野英岐部会長 子育てをする前にやばいと思っちゃうという感じですか。

○蛸崎奈津子委員 483ページの一番下のお子さんがないという茶色い部分、この人の年代。

○吉野英岐部会長 この部分だけ。

○蛸崎奈津子委員 ですかね。年代で見ると若い方なんだなというところ、これから生もうとされている方が低めなのだなというところが分かるのですけれども。

○松本政策企画課特命課長 485ページからが子供のいるいない別の平均値で年齢別になっておりまして、子供がいるというのを全部まとめて1人、2人、3人、4人以上で、あとは子どもはいないを年齢別に示したものが485ページです。

○吉野英岐部会長 はい、どうぞ。

○和川央副部会長 多分蛸崎委員のおっしゃりたいのは、結婚したのだけれども、子供を生む前の人をというのを知りたいということですかね。であれば、夫婦世帯で20歳、30歳で子供がいるいないで見ると、少し蛸崎委員の問題意識には近づくかなと思うのですが、そういう理解でいいですかね。

○蛸崎奈津子委員 そうですね。

○和川央副部会長 多分そういうのが、夫婦世帯というのは多分一つポイントになって、要は結婚されている方ということが一つ蛸崎委員の問題意識に近づくかなと思います。

○蛸崎奈津子委員 ありがとうございます。

○吉野英岐部会長 サンプル数がどれだけ減るか。

○和川央副部会長 おっしゃるとおりです。

○吉野英岐部会長 まずサンプル数がどのくらいあるのか確認してみて、できそうだったらぜひしてみるということにしましょうか。仮説としては、夫婦ではあるけれども、子供を生むか生まないかの決断に子育てに関わる様々な苦勞が入り込んで、やっぱりやめようとかということが起こるのではないかということです。

○蛸崎奈津子委員 そうですね、もしそうであれば今たくさんいろんな子育て支援のいろんな情報は出してくださっているのですが、何か出し方であったりを見直していく一つのきっかけになるのかなと思いますし、一方で既にある程度年齢がいていらしてお子さんいないという方であれば、もしかして実感として実際に教育現場ですとかが間接的な情報で判断されているのかなとも読み取れるのかなと思った次第です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。どれくらいそういう人がいるのか確認してみてください。

では、谷藤委員どうぞ。

○谷藤邦基委員 多分その周辺の問題というか、似た問題、意識の中で、令和6年度のレポートで一回分析しているはずですよ。ちょっと内容が私もかなり薄れているのですが、そのときにやった分析と同じことをもう一回やってみる。あと、今出た項目がそのときやっていたのかどうか分からないので、追加で分析するポイントがあればそのこともやっていただいて。

実はこの子育てと子どもの教育のところで、子どもはいないという人たちの実感が低いというのが多分将来的に大きな問題になるのかなと、あるいはここに手を打つ必要が多

分あるのだろうなと。だから、蛸崎委員がおっしゃるように、既婚かどうかという問題もあるし、そもそも未婚かもしれないですけども、若い人たちが結構子育ての実感が低い、しかも子どもはいないとか、子育ての経験がない人たちが低いというのは、やっぱりイメージだけで思っている部分はあるかもしれないので、ここは結構何か行政的に関われる余地もあるかもしれないし、特に人口減少に直に関わってくることなので、ここは少し吟味して、見てみる必要はあるのかなと思っておりました。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

そのほか。

竹村委員どうぞ。

○竹村祥子委員 岩手の中でのそのデータとして出てくるわけですけども、もしできるとするならば、26年の幸福白書の中で、岩澤先生が特集になっていますよね。2025年の出産力調査、全国の調査ありますよね。出産力調査のデータが例年だと9月くらいに出るかと思うのですけども、全国データではなくて、岩手県の出産力調査の部分を出していただくということはできるものでしょうか。全国のやつだと国立社会保障・人口問題研究所の全国データではちょっと見えないのですけども、独身者調査と夫婦調査があって、元データはもちろん岩手というところに出ていると思うのです。なので、もしできれば県の方でそれを一緒に出していただけると、今言った年齢もさることながら、結婚して子供がいる人たちとそうでない、若いこれから結婚する人たちのデータが出てくる。なおかつ全国と同じかどうかというのが出てくる。

この問題は、もう一つ女性の地方住みづらさ、要は定着の苦難問題とも関わってくるだろうと思うので、この調査が大分長くやっているところからすると、そこら辺の何か話と検討するのにはいいデータになるのではないかと思います。できればよろしく願います。

○吉野英岐部会長 これは調査統計課、こっち、どっち。

○佐藤政策企画部副部長 出産力調査については、多分そんなに複雑な統計ではないので、データさえもらえれば岩手県と全国を比較できると思いますし、今言われたとおり独身者と結婚しているのを全国で見れば結婚していれば出生数というのはほとんど減っていないというのもあるので、そこは岩手県でどうなっているかというのが見たいなと思いますので、ちょっとそこは預からせていただきたいと思います。

○吉野英岐部会長 有配偶者でしたっけ。

○佐藤政策企画部副部長 そうです。

○竹村祥子委員 回答も女性回答なのです、妻回答なのです。独身者の方は男性も女性も回答しているのですけども、今のテーマには割合ぴったり来るかなと。

○吉野英岐部会長 分かりました。

はい。

○和川央副部会長 今のに関連するのですけれども、国勢調査で分析すると 2015 年ぐらいまでは岩手県の出生数の減少要因というのは婚姻要因がほぼほぼ全てだったのです。だから、先ほど副部長が言ったように結婚すれば子供を生んでいただける状態だったのですけれども、実は 2015 年だったか 2010 年以降婚姻しても生まない傾向が岩手県でも出てきているので、今蛸崎委員が言った問題意識というのは、岩手県ではこれまでは結婚してもらえば何とかなるよというところだったのがだんだん結婚してからどうするというのが岩手県の問題になりつつあるということも含めて整理していただくといいかなと思います。

以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。ちょっと時間が来たので、今日はここまでというか、一貫して高い、低いのところまでの分析にして、次回以降は基準年との比較だけではなくて、平成 31 年との比較であるとか、そのほかの資料 9、10、11 についてもう一回圏域別とか引き続き、ここで 30 分ぐらい予定していたので、30 分押している感じなのですけれども、次回はその 30 分を先に入れてから、その次のトピックどうするかという話にしていきたいと思います。

今の一貫して低いところは、さっき最後出ましたけれども、やっぱり人口減少を何らかの形で食い止めるというのは変なのだけれども、減少幅を少なくするというのはずっと県の最後の 2 年もその政策で行くと思うのですけれども、その要因も確かにいろいろあるけれども、ここに出てきた余暇の充実が感じられないとか、子育て、子どもの教育が大変そうとか、お金が、所得が必要だと、なかなか額に達していないという実感が全部足されてしまうと、確かに住みづらいというか、生活しづらい、あるいは子供を育てにくい県というイメージが起こってしまって、その結果、子供を生んでも出ていくとか、子供を連れて入ってこないとか、様々な社会減、社会増も含めて人口減少になかなか歯止めがかからないということを考えると、一貫して低い 4 つは、やっぱりこのまま置いておいて、動きがないのだから、特段問題がないとはなかなか扱いにくいというか、やっぱりずっと低いまま実感が感じられていない 4 分野については長期的トレンドも分析すべきだと谷藤委員の御意見もありますので、ここについてどういう手を今後打っていかれるかということも頭に入れながら分析を進めていきたいと思っています。その意味で、平成 31 年との比較も一定程度効果があると思いますので、ぜひぜひ次回また御意見いただければと思います。ちょっとなかなか思ったとおり進んではいけないのですけれども、あと 2 週間ちょっと間空きますので、その間にいろいろ追加の資料をつくってもらった上で、また御議論していきたいと思います。

取りあえず今日のところはここまでにして、事務局にお返ししたいと思います。

○松本政策企画課特命課長 ありがとうございます。

（２）その他

○松本政策企画課特命課長 次回の部会も前年同様ですけれども、県民意識調査の結果の公表前なので、非公開とさせていただきたいと思います。

○田高政策企画課評価課長 本日も長時間の御議論どうもありがとうございました。次回の部会ですが、先ほど部会長からお話あったように再来週、２週間後の６月１日月曜日１４時からこの会場で開催する予定としております。よろしくお願いいたします。

３ 閉 会

○田高政策企画課評価課長 それでは、以上をもちまして本日の部会を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

○吉野英岐部会長 長時間ありがとうございました。また来週よろしくお願いします。